狂馬

佐左木俊郎

炭坑の坑（あな）は二つに区別されている。竪坑（たてこう）。斜坑（はすこう）。――地上から地下へ垂直に、井戸のように通うているのが竪坑で、斜坑は、地上から地下へ、勾配（こうばい）になって這入（はい）って行くのだから樹木に掩（おお）われた薄暗い坂路（さかみち）を連想（れんそう）させる。

斜坑は、動物の通路を第一の目的として掘られたものであろう。炭坑に蒸気機関や電動機の採用されていなかったころ、人間の肩や背の他には、馬が一切の労働力を供給していたのだから。炭坑に機械力が這入って来てから、馬は、次第に廃（すた）れて行ったのであるが、古くからの炭坑へ行くと、今でも、馬の残っていると

ころがある。
青(あお)！（その馬は若い時からそう呼びならされていた。）
青は鉱山主の温情主義から、坑(あな)の中に養われていた。十何年間を、地の底の暗闇(くらやみ)の中に働いていたのであったが、最早すっかり老衰してしまって、歩くことさえも自由ではなくなっていた。併し、青は、坑内に働いている誰からも愛されていた。惨(みじ)めな老人を労(いたわ)るようにして労られていた。
「青！　なんとしたことだい。青！　少し元気出せよ。ほう！　ほう！　ほら！」

坑夫達はそんな風に言って、そこを通りかかる度毎(たびごと)に、青の鼻先へ触(さわ)ってやるのだった。併し青は、黒い鼻先をほんの微(かす)かに蠢(うご)めかすだけであった。感覚の一切を、過去の生活の中へ置き忘れて来てしまったようにして、森の中の沼のような暗い眼を向けているのだった。その眼が果たして見えるのか見えないのか、ただじっと、暗い空間の一点に向けて据(す)えているのだった。

「青！　本当にお前はどうしたのよ。おう？　元気がなくなったなあ。青！　ああ、俺の飯が残っているから、お前に少しやろう。」

併し青は、坑夫達がそうしてくれる飯も、ほんの少しきり食わなかった。それも、一度口の中に入れたものを、思い出したようにしては噛（か）み、またしばらくじっとしていて、思い出したようにしては、また噛むのだった。

青は本当に生きているのか死んでいるのかわからなかった。それは襤褸（ぼろ）で拵（こしら）えた馬のようでもあった。硝子（ガラス）玉の眼を嵌（は）め込んだ剝製（はくせい）の馬のようでもあった。

「俺達も、年を取れば、青のようになるんだろうなあ。青！　俺達も今にこの坑（あな）の中でお前のようになるんだよ。お前よりももっともっと惨めになるかも知んね

え。」
「それはそうよ。人間も馬も変わりがあるもんじゃねえ。なあ青！」
坑夫達はいつもそんなことを言うのであった。

＊

青が養われている場所には、夜になると、若い働き盛りの馬が二三匹繫(つな)がれた。
若い馬は、ぴしりっぴしりっと尾を振った。虻(あぶ)がいるのでも蚊がいるのでもない。ただぴしりっぴしりっと無暗(むやみ)に尾を振った。人が通りかかると、首を高く持ち上げて（ほほほ！）と嘶(いなな)いた。脚(あし)を上げては石炭の

破片(かけら)を踏み砕(くだ)いた。何をやっても、がつがつとそれを喰った。明るい世界から引き込まれて来たばかりの馬は、全身が感覚で、全身が力だった。

青は、この若い馬を見ることで、過去の記憶の中に置き忘れて来た感覚の幾分かを、そこに取り戻して来るような様子だった。そんなとき、青の耳は、微(かす)かながらに動き出すのだった。その暗い眼は、空間のどこかにただ向けられているのではなく、何かを視詰(みつ)め出しているようだった。

*

炭坑にはストライキが始まっていた。坑内に働いて

いる人達が、青のようになりたくないための運動であった。坑内からは、総ての労働者が、地上に引き上げて行くことになった。若い働き盛りの馬達は、その前に、鉱山主によって、坑の外へ引き出されていた。

併しどうしたのか、青だけは、そのままそこに残されていた。

坑夫達は、今、坑の中から引き上げて行きながら、青の前に通りかかって、足を停(と)めたのだった。

「青！　お前だって、生きているんだもの、何も食わずに、何も飲まずに、幾日も生きているってわけには行くめえ。」

「いくら馬だからって、随分ひどいことをするもんだなあ。これが人間のように口のきけるもんなら、黙ってはいめえ。なあ。」

「おい！　引き出して行ってやろうじゃないか？」

誰かが力をこめて言った。

坑夫の一人は、青の首に、自分の帯を投げかけた。

そして青は、坑夫達の一群の背後に、全く力のない足どりでよろよろと引かれて行った。それは、牽(ひ)かれているというより、曳(ひ)き摺(ず)られている形だった。青は、二歩歩いては立ち停(ど)まり、三歩歩いては立ち停まるのだった。

「青！　後から押してやろうか？」
或る者はそう言って、青の背後から、両手をかけて押し上げたりした。併し青は、その人間を蹴るでもなく、斜坑の斜面を押し上げられて行った。
「おい！　青の頭から、何か冠せなくちゃ、駄目だよ。何十年も坑内にいた馬を、明るいところに引っ張り出すと、すぐ死んでしまうんだっていうからなあ。」
古参の坑夫が注意した。若い坑夫は半纏を脱いで青の頭から引っ被せた。

*

地上には初夏の陽光がぎらぎらと降り注いでいた。

眼を射るような光線だった。

　炭坑事務所から二十間ばかり離れて、三四本の大きな榎（えのき）が立っていた。その下に、三匹の馬が繋がれていた。その三匹の馬は、坑夫達に引かれて坑内から出て来た青の姿を見ると、首をあげて（ほほほ！）と嘶いた。

　青はすると、坑夫の手に引かれていたにもかかわらず、立ち停まった。

「青！　なんだって停まるんだい？　青！　青！」

　併し青は歩かなかった。最早、青は今までの青では無くなっていた。首を上げ、耳を欹（そばだ）てて、その耳に全

身の感覚を集めようとしていた。
　そのとき、榎の下から、また、馬が嘶いた。その次の瞬間、青は、坑夫の手から手綱［＃「手綱」は底本では「手綱」」を奪って駈け出した。頭から掩いをされたまま一散に駈け出した。
「馬鹿野郎！　誰だあ？　青を引っ張り出して来たのあ？　気違いになるのきまっているじゃないか？」
　誰かが事務所の方から怒鳴った。青はその辺を滅茶苦茶に駈け廻って、榎の下に嘶いている馬達を、探そうとしているのだった。

（附記）長い間を坑内に封じていた馬を、地上の明るい世界に引き出せば、すぐ死んでしまうか、気違いになってしまうそうである。またクロポトキンは「相互扶助論」の中で、シベリヤの野に放牧されている馬が、嵐に襲（おそ）われると、谷底の何処（どこ）かへ、申し合わせたように、一カ所へ一緒になるものであることを言っている。

――昭和六年（一九三一年）『新青年』七月号――

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
　　１９８４（昭和59）年４月14日初版発行
初出：「新青年」博文館
　　１９３１（昭和６）年７月号
入力：田中敬三
校正：林　幸雄
２００９年３月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。